

庭で発見「源氏物語」の世界

菅野 レイ子 福島県南相馬市 七十七歳

「花に親しむには、人間のお付き合いと同じで名前を覚える事が第一歩である」
 花の写真家の言葉である。コロナ禍による長期間に渡る自粛生活、こんな時こそ庭に出て、本格的な庭の花々とのお付き合いを開始した。花達は順番を決めたかのように次々と花を咲かせる。これまで何となくながめていた庭で新発見する日々、それらを撮影し、更にノートに記録し、名前を正確に覚えるように努めた。

これらの事によって、私はわが家の庭に「源氏物語」の世界が広がっている事を発見した。
 まずは、庭全体を見渡せる場所に鎮座していたのが「紫式部」。花の後に紫色のたくさんの実をつける。その色には、品格があり式部そのものだと感じた。

そして「美男葛」、蔓が他の木にからまって伸び赤い実をつける。指でつぶしてみたら、粘りのある液が出てきた。昔、男性が整髪料として使っていたという。源氏物語に登場する美男の光源氏もつけていたに違いない。

更に「檜扇」から宮中の女性が扇をひらひらさせる姿を、「酔芙蓉」からは、ほろ酔いの男性の姿を想像した。
 名前を覚えるという行動から思いがけない楽しみがある事を発見したのである。

人と人が自由に会える日が来た時、自慢げに解説する自分を想像し、更なる世界を発見しようと庭の手入れにいちだんと熱が入る。そんな日が一日もはやく来てほしい。